

むかし、あるところに、貧乏なおじいさんとおばあさんがいました。

ある日のこと、おばあさんは、家の中をはいっていました。おじいさんは、土間をはいっていました。すると、土間に、豆がひとつぶ落ちていました。おじいさんは、豆をひろって、

「おばあさん、おばあさん。豆をひとつぶ見つけたよ。畑にまいて千粒にしようか。白でひいてきなこにしようか」といいました。すると、豆は、おじいさんの指のあいだから、ぼろっと、こぼれ落ちました。豆は、ころころころとところがつて、土間のすみのねずみのあなに入ってしまった。おじいさんは、

「ありや、えらいことだ。せつかくひろった豆をなくした。おばあさん、おばあさん、早く薪を一本持ってきておくれ」といいました。

おばあさんは、いろりから薪を持って来て、ねずみのあなを掘りました。おじいさんは、あなのおくに入っていました。

じい　じい　ころがした　豆知らねえか

じい　じい　ころがした　豆見なかったかあ

おじいさんが、歌いながら入っていくと、道ばたに、石のお地蔵さまが立っていました。

「もしもし、お地蔵さま。じいがころがした豆を見ませんでしたか」と、おじいさんが聞くと、お地蔵さまは、

「それなら見たけれど、わしがひろって、いって食べた」といいました。おじいさんは、

「それならよかった。じゃあ、帰ります」といって、帰ろうとしました。お地蔵さまは、気の毒がつて、

「じいさん、じいさん。ちょっと待て。いいこと教えてやるから」といいました。

「何を教えてくれるんですか」と、おじいさんが聞くと、お地蔵さまはいいました。

「ここからずうっとおくに入っていくと、赤い障子が立っていて、ねずみたちが嫁入りのしたくをしているから、唐臼つきでもして手伝ってやりなさい。それから、また先へ行くと、黒い障子が立っていて、鬼どもがたくさん集まってばくちをしているから、にわたりの鳴くまねをして、お金を取ってくるといい」

おじいさんは、お地蔵さまに、

「はい、ありがとうございます」といって、おくへ入っていきました。

しばらく行くと、お地蔵さまがいった通り、赤い障子が立っていました。おじいさんは、

「はい、おめでとうございます」といって、障子を開けました。すると、中から、ねずみのお嫁さんが出て来て、

「何をしに来たんですか」とたずねました。

「おれは、こつちで嫁入りがあると聞いたから、唐臼でもついて手伝おうと思ってな」と、おじいさんがいうと、お嫁さんは、

「ありや、それはよいところに来てくれました。早く入って手伝ってくださいな」といって、おじいさんを家の中に入れてくれました。中に入ってみると、そこはりっぱな家でした。一の座敷には朱膳朱椀に唐銅火鉢が並べてありました。二の座敷には、絹の小袖がたくさんかけてありました。三の座敷では、ねずみたちが、おおせいで、臼に黄金を入れて、じゃくりじゃくりつきながら、

よいとさのやえ

よいとさのやえ

にやごという声

聞きたくねえじや

と歌っていました。

おじいさんは、唐臼について黄金つきを手伝ってやりました。ねずみたちは喜んで、美しい赤い絹の小袖をたくさんくれました。

おじいさんがまたずっとおくへ行くと、黒い障子が立っていました。のぞいてみると、中は馬屋で、鬼どもがおおせいで、びったくた、びったくたと、ばくちをうっていました。おじいさんは、鬼どもに気づかれないように、馬屋の桁にのぼって見ていました。

夜中になると、おじいさんは、箕をばたばたとたたきながら、

けけろう

と、にわたりの鳴きまねをしました。すると、鬼どもは、

「あれは、一番鶏だな」といいました。

おじいさんは、しばらくたつてから、また、箕をばたばたとたたいて、

けけろうやー

ときました。鬼どもは、

「あれは、二番鶏だな」といいました。

おじいさんは、また、しばらくたってから、箕をばたばたとたたきながら、

けけろう、けけろう

といました。鬼どもはびっくりして、

「それ、三番鶏だ。夜が明けたらたいへんだ」といって、お金はそこらに散らかしたまま、われ先に、どこかへ逃げて行ってしまいました。おじいさんは、馬屋の桁からそろそろと降りてきて、お金をみんな持って帰りました。

おじいさんとおばあさんは、大喜びで、それまで着ていた破れた着物きものはぬいで、ねずみにもらった赤い絹の小袖を着ました。それから、お金をちらんぽらんいわせながら、まずに入れてはかりました。

そこへ、となりのおばあさんが、

「からんころん、火を分けてくれ」といって、やって来ました。そして、

「ありやりやあ。あんたたち、どうしてそんなに、いい暮らしになったんだ」とききました。そこで、おじいさんとおばあさんは、石のお地藏さまに教えてもらって、赤い絹の小袖やお金をたくさん持って帰って来たことを話しました。となりのおばあさんは、「そりやまた、なんとうらやましい話だ。それじゃあ、おらも早く家に帰って、おじいさんをそこに行かせよう」といって、そそくさと帰って行きました。

となりのおばあさんは、さっそく家の中をはき、おじいさんは土間をはきましたが、豆はひとつぶも落ちていません。おじいさんは、大きな声で、

「おばあさん、おばあさん。その俵たわらから、豆をひとつかみ持っておいで」といいました。そして、その豆をぜんぶねずみのあなに入れて、薪であなを掘って、おくへ入っていきました。

おれの豆を だあれがぬすんだあ

おれの豆の お代をよこせ

と歌いながら行くと、道ばたに石のお地藏さんが立っていました。となりのおじいさんは、

「ここに豆がころがって来なかったか」とききました。お地藏さまは、

「それならころがって来たけれど、わしがひろって、いって食べた」といいました。お

じいさんは、

「なんてことをするんだ、この地藏やろう。豆の代わりに、絹の小袖やお金やらをよこせ」といいました。すると、お地藏さまは、いいました。

「ここからずうつとおくに入っていくと、赤い障子が立っていて、ねずみたちが嫁入りの支度をしているから、唐臼つきでもして手伝ってやりなさい。それから、また先へ行くと、黒い障子が立っていて、鬼どもがたくさん集まってばくちをしているから、にわとりの鳴くまねをして、お金を取ってくるといい」

となりのおじいさんがおくへ入っていくと、お地藏さまがいった通り、赤い障子が立っていました。おじいさんは、

「はい、おめでとうございます」といって、障子を開けました。すると、中から、ねずみのお嫁さんが出て来て、

「何をしに来たんですか」とたずねました。

「おれは、こつちで嫁入りがあると聞いたから、唐臼でもついて手伝おうと思ってな」と、おじいさんがいうと、お嫁さんは、

「ありや、それはよいところに来てくれました。早く入って手伝ってくださいな」といって、おじいさんを家の中に入れてくれました。そこはりっぱな家でした。一の座敷には朱膳朱椀に唐銅火鉢が並べてありました。二の座敷には、赤い絹の小袖がたくさんかけてありました。三の座敷では、ねずみたちが、おおぜいで、臼に黄金を入れて、じゃくりじゃくりつきながら、

よいとさのやえ

よいとさのやえ

にやごという声

聞きたくねえじゃ

と歌っていました。

となりのおじいさんは、絹の小袖や黄金が欲しくなって、大きな声で、ねこの鳴きまねをしました。

にやごう

にやごろっ

そのとたん、あたりが真っ暗になりました。おじいさんは、これはどうしたことだと思

って、暗がりの中をはいまわってさがしましたが、絹の小袖も黄金もさっぱり見つかりません。そのままおくへはって行くと、黒い障子が立っていました。のぞいてみると、鬼どもがおおぜいで、びったくた、びったくたと、ばくちをうっていました。おじいさんは、鬼どもに気づかれぬように、馬屋の桁にのぼって見ていました。

夜中になると、おじいさんは、箕をばたばたとたたきながら、

はあ、一番鶏っ

とどなりました。すると、鬼どもは、びっくりして、

「あれは、なんだ」といいました。

おじいさんは、また、箕をばたばたとたたいて、

はあ、二番鶏っ

とどなりました。鬼どもは、

「あれは、なんだ、なんだ」といって、さわぎました。

おじいさんは、また、箕をばたばたとたたきながら、もっと大きな声で、

はあ、三番鶏っ

とどなりました。鬼どもは、

「あの声は、昨夜のにせ鶏だな。ふんづかまえてやれ」といって、桁にのぼって行きました。

鬼どもは、大急ぎで桁にのぼったものだから、鼻のあなをいろりの鉤にひっかけてぶらりと下がった者もありました。おじいさんは、それを見て、大笑いしました。そこで、すぐに鬼に見つかってしまいました。鬼どもはおじいさんをぶったりけったりしました。おじいさんは、からだじゅう血だらけになって、おいおい泣きながら帰って行きました。となりのおばあさんは、あなからおじいさんを見つけて、

「あれあれ、おじいさんが、赤い絹の小袖を着て、あんな歌を歌って帰って来たよ」といいました。そして、着ていたぼろをぬいで火にくべて、はだかになって待っていました。おじいさんは、やっとのことであなからはい出しましたとき。

おしまい

村上郁再話

資料『炭焼長者』関敬吾編／中央公論社